COM TALK

小野 真弓

三年前から一年に一回、プライベートで海外旅行にでかけています。最初はパリ、昨年はサンフランシスコ。今年はチェコのプラハに行って来ました。原則はひとり旅ですが、プラハは友人と六日間のふたり旅でした。

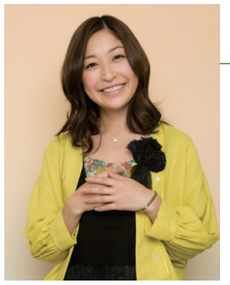
プラハにしたのは、雑誌に「世界でいちばん美しい町」と載っていたから。出発前の下調べからワクワクしていました。訪れてみるとイメージ通り。古い教会やお城が沢山あって、中世の世界に迷い込んだような感じでした。

プラハは芸術の町でもあり、夜になるとライトに光る石畳をドレスアップしてコンサートや人形劇鑑賞に向かう人々で賑わい、昼間と違ったエキゾチックな雰囲気です。私も人形劇を観に行ったのですが「言葉が分からないので理解できないのでは?」と不安もありましたが、音楽に合わせたマリオネット(あやつり人形)の動きを観ているだけで充分楽しめました。

日本で気に入っている街は札幌です。一昨年、冬に「壁男」という映画のロケで一ケ月間いたのですが、夜でも雪明かりでほんのりと明るい幻想的な雰囲気がとても素敵でした。以前冬に訪れたカナダのバンクーバーに、どことなく似ていました。

降る雪質もサラサラで、黒いセーターについた雪が、アクセサリーにしたいほどハッキリとした結晶の形なのには感動しました。

まだ車の免許を持っていないので最近、残念に感じることがあります。例えば北欧家具や雑貨に最近ハマっていて、よくみに行ってます。かわいい棚や変わったソファなど種類も多くて、値段も手頃。ところが商品の価格に比べて配達料金が少々高いんです。だから、車があれば充分買い物が楽しめるのですが・・・。



Mayumi ONO

■プロフィール
おの・まゆみ　千葉県出身。

1998年にサンミュージックのオーディションに合格しデビュー。CM、ドラマ、映画、舞台と幅広く活躍中。
主演映画が今春公開を控えており、また歌手としてもCDをリリースしている。写真集、DVD、トレカも多数リリース。

COM Vol.22　CONTENTS

COM TALK	小野 真弓	2
Front Line 建築家インタビュー	古谷 誠章	3
Arrangement 納入事例	グラントウキョウ　サウスタワー	8
	リガーレ日本橋人形町	10
	調布サウスゲートビル	12
Topics トピックス	省スペースとハイルーフ収容を両立した多層循環円形方式「AURO パーク」	14
	最適な運営プランをご提案する日精の駐車場運営管理サービス	15
Information COMプレゼント		16

変化を受容できる建築とは

古谷 誠章 *Nobuaki FURUYA*

生活環境は静止画像ではない。
絶えず変化し、いつも工事中である。
人間にとって使い勝手の良い、可変性の高いユニバーサルスペースこそ、
私がめざす理想の建築イメージである。

駅に直結した市民館

長野県茅野市の市民館は、敷地が中央線の茅野駅に隣接していました。私がはじめて敷地を見たのは、ちょっと寒い季節で、女子高生たちが駅の跨線橋の通路で寒そうに待っていました。電車が着きそうになると、階段を駆け下りていって乗車する。その光景を目にして、なんとかこの跨線橋と施設を直結させて、そのつなぎの部分に図書館を置けないだろうか。電車が着く一分前までそこで本を読んで待っていられるような、今まで見たことがない、駅に直結した空間にできないだろうかと思いつきました。

茅野市民会館　photo/ 浅川敏

催しが何もない日に、あかりが消えて閑古鳥が鳴いているような施設ではなく、駅周辺に来た市民が休憩できる、都市の広場のような場所にしたいと考えました。駅に直結しているということは、車を持たない中高生や高齢者にもアクセスしやすいはずですから。

基本構想では市民館と駅の間は公園になる予定でしたが、公開プロポーザルを通じて、駅に直結した設計案を認められました。図書室が駅につながり、ホームからガラス越しに、市民が憩うロビーの見える市民館ができました。

茅野市民会館図書室

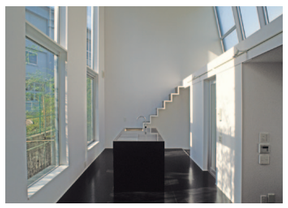
ホームからロビーが見える　photo/ 浅川敏

快適な「空っぽの箱」

一階と二階に一戸ずつだけの、小さなアパート「バウムハウス」。私は、最小限度の設備しかない「空っぽの箱」のような部屋をデザインしました。台所には流しだけ。玄関には下駄箱もない。押入れもない。その方が、住む方が自由に好きなものだけを加えて、気に入った世界にできるのです。この小さなアパートが好評で、同じコンセプトのものを作って欲しいという施主が次々と現れ、高円寺、代田と仕事が続きました。

ある音楽業界で働く入居者は、壁をすべてLPレコードの棚で埋め、窓もつぶしてターンテーブルを置いていました。「今まで住んだ部屋では、レコードの棚を置く場所が限られていましたが、この部屋はいいですね。何にもなくて」と喜ばれました。

高円寺南アパート　photo/ 松岡満男



畳の部屋の融通性

発想のヒントになったのは、私自身が暮らした家でした。六畳一間の一軒家。一間なので、食事も、寝るのも、勉強するのも同じ部屋。私たち兄弟の机はみかん箱で、使わない時は重ねて置いておく。これは、今考えれば、ユニバーサルスペースで、何にでもなる場所です。そのあとに暮らした日本風の平屋の住宅も、畳の部屋ばかりで、どこがリビングでどこが寝室といった決まりはありません。私の部屋も成長に従って、弟と一緒だったり、広い部屋に移ったり。用途に応じてしつらえが変わるだけ。この経験から、自由にしつらえられる空っぽの箱の居心地のよさを知っていたのだと思います。

代田の切り通し　photo/ 浅川敏

変化を前提とした設計プラン

「生活環境は静止画像として描かれるものではなく、絶えず変化し、いつも工事中である」というのが、私の持論です。そう考えなければ、不便を強いられる工事中が長すぎます。変化し続けていることを前提としてデザインする。私が手がけた群馬県旧中里村の庁舎のデザインは、まさに変化を前提として考えたものです。

旧中里村庁舎　photo/ 松岡満男

人口千人にも満たない、関東では離島を除くと最も人口の少ない村が中里でした。庁舎の建て替えが決まったとき、近隣の自治体との合併話が持ち上がっていました。村役場として建てるけれども、早晩村役場ではなくなるかもしれない。その変化を受容できる建築を考えることは、私がいつも抱いていたテーマと合致していました。

子どもたちとのワークショップ

私は一計を案じて、子どもたちとのワークショップを提案しました。村の小中学生たちと、空っぽになった庁舎をどう使うかを一緒に考えました。「階段を使って筋トレしたら」「棚がたくさんあるから、水槽を置いて水族館に」「議会と給湯室を使ってクラス会を開いては」・・・彼らを通して、「庁舎が空になったあとのことも村は考えているらしい」という話が、地域に浸透していきました。子どもたちはまた、村の将来を担う人材でもあります。自分がかかわったこの庁舎に愛着と責任を持って使い続けてくれることが、私の願いでした。

工事中に広域合併が実現し、この建物は一度たりとも役場として使われないまま、第二の住民利用施設として完成しました。変化を予測してデザインし、周知していたので、誰も驚きません。当たり前のように使われています。

旧中里村庁舎　photo/ 松岡満男

南イタリア洞窟都市マテーラ

南イタリアの洞窟都市

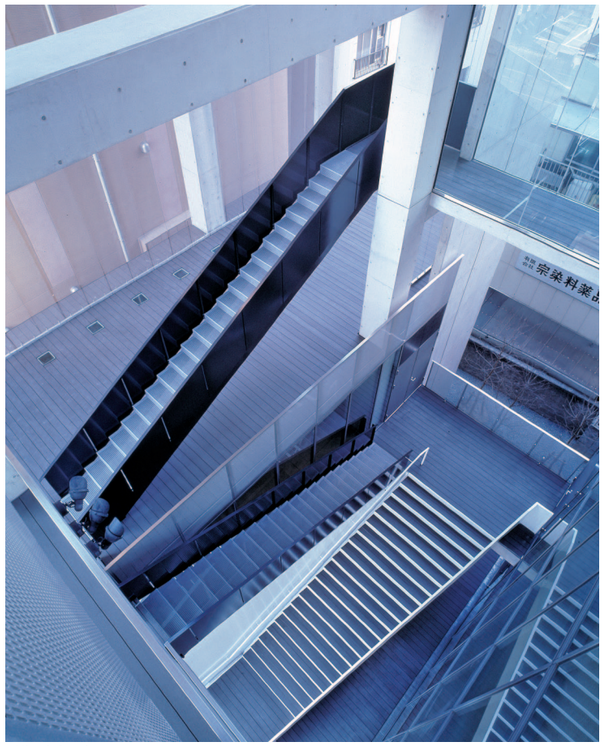
街のあり方としてすばらしいと思ったのは、南イタリアのマテーラです。もともとは、旧石器時代の洞窟に住み始めたところで、その後、硬い岩山を彫りぬいて人々が暮らしていました。切り出した石で外側に玄関などを作っていたのですが、時代を経て順々に石が積み重なり、建築的なものが完成されていった。古い洞窟の住居から、現在の家までが積み重なっている街です。歴史が全部見えるような家。すべて同質の石なので、自然の景観から人工物の建築まで、同じ色で調和しています。建築技術の発展ぶりもよくわかります。

ところがこの街も、一九五〇年くらいから、一部で石積みの崩壊などがあり、市当局が住民全員に避難勧告を出し、人の住まない街になってしまいました。すると、見る間に石の住居群の崩壊が進んでしまった。日本のように木造でなくても、人が住まなくなると、建築物は壊れてしまうのですね、不思議なことに。都市と建築がつながったようなその町で、人の生活がなくなるということは、人体から血液がなくなったようなものなのでしょう。

都市計画の未来像

これまでの都市計画は、機能が異なったものを区分して、それぞれが能率よく働くように集約していました。工場なら工場を集め、住宅なら住宅を集める。分離して集約化することで効率を高め、専門性を高める。以前はごちゃごちゃしてまとまっていたものを、能率が悪いとみなした。今、それをちょうど反対に考えるべきです。離れ離れになっていたものを重ね合わせる。昼間しか使われないオフィスビル街に、夜間の使い道としての機能を重ねることができないだろうか。あるいは、世代間でシェアする。子ども、大人、高齢者。分離させることではなく、集合させることで、都市の中心街の空洞化の解決ができないかと考えています。

集合のきっかけをもたらす、ポジティブフィードバックとなる新しい発想こそ、これからの都市計画や建築デザインにとって大切なものになっていくでしょう。



イル・カセット　photo/ 松岡満男

快適なパーキング

茅野市民会館　photo/ 浅川敏

駐車場も、車を置く空っぽの箱と考えれば、いろいろな使い方が生まれるのではないでしょうか。音楽を聴いたり、食事をしたり、仮眠をとったり、車の中はすでに居住空間でもあります。しかしまだ、居住空間としての車に配慮した快適な駐車場というのは生まれていません。

私が設計した駐車スペースでは、アスファルトに引く白線を嫌って、目立たない破線に変えてみたり、芝生を植えてみたりしました。いつか、誰も思ってもみなかったような駐車場の設計もしてみたいですね。

やなせたかし記念館 / アンパンマンミュージアム
photo/ 古館克明

Zig House / Zag House　photo/ 松岡満男

P R O F I L E

古谷誠章 Nobuaki FURUYA

早稲田大学教授。建築家・一級建築士。
1955年東京都生まれ。
早稲田大学理工学部建築学科卒業後、早稲田大学大学院博士前期課程修了。近畿大学助教授を経て、1997年より現職。1994年スタジオナスカ（現NASCA）設立。

主な受賞暦
1991年吉岡賞、1999年日本建築家協会新人賞、2000年・2002年・2003年・2004年日本建築学会作品選奨、2007年日本建築学会賞作品賞。